

19 江戸時代の温泉と梅毒

鈴木 則子

本報告は江戸時代、西日本の名湯として人気を二分した有馬温泉と城崎温泉をフィールドに、温泉案内書と温泉医学書を中心的な史料としながら、江戸時代の温泉の医療の場、ことに梅毒治療の場としての側面について論じ、江戸時代の人々の医療において、湯治がどのような意味をもったのかを考察しようとするものである。

従来の温泉史研究は経済史や文学史的な分析が中心で、温泉の医療としての側面からの研究は軽視されてきた。たきらいがある。すなわち地場産業としての温泉の経済効果や、温泉地で詠まれた詩歌などの紹介が主で、その結果、遊興の地としての温泉が描かれることになる。しかしながら、温泉をめぐる医学的な史料を分析していくと、これらとはまた異なる江戸時代の温泉の側面が見えてくる。

なお数少ない温泉医療史研究は殆ど戦前のもので、しかもこれらは近代医学の視点から近世温泉治療の有効性を論じたものである。したがって本研究の掲げる、江戸時代の人々にとって湯治がどのような意味を持ったのかを明らかにする、という課題に応えるものではない。

まず、江戸時代前半に書かれた有馬温泉の温泉案内書の記載を見ていくと、それまで温泉の効能を霊泉譚によって説いていたのが、一七世紀末から一八世紀にかけて、医学的な説明に変化していくことがわかる。その背景には博物学の流行や人々の養生への関心の高まり、温泉数の増加による温泉地間の競争の激化という事情が指摘できる。

一方城崎温泉の温泉案内書は、一八世紀に大きな変化を見せる。城崎には計七つの湯壺があつて、それらが異なる効能を持つことを温泉の特徴としていたが、それらの湯壺の内、梅毒に効果があるとされた湯が、人気を集め始めるのである。

この動きにさらに拍車をかけたのが、元禄期に城崎温泉で臨床実験を繰り返した後藤良山・香川修庵師弟であ

る。後に後藤良山は日本で初めての温泉医学書『一本堂薬選続編』を出版し、その書の中で城崎温泉を梅毒を治癒する湯として称揚し、有馬の湯をかえってそれを悪化させると批判した。この書の影響力は非常に大きく、西日本の湯治客の流れは確実に有馬から城崎へ移っていった。温泉医学が庶民の温泉選択の基準として大きな力を持ったのである。

客の減った有馬温泉は、起死回生策のひとつとして、自らに有利な新たな温泉医学理論を医師柘植彰常とともに展開し、幕末に『温泉論』を刊行することになる。

以上、報告者は江戸時代の温泉地が当時の人々にとつて、娯楽の場としての側面を強めつつあることを否定するものではないが、有馬と城崎の歴史が示すように、本質的には温泉医学に基づいた治療の場であつたと考えらる。また江戸時代の民衆の医療環境においては、俗信よりも医学的知が大きな影響力を持つようになっていった。しかもそのような医学的知、医療情報は、書物という形態で人々に伝達され、またそのこと自体が情報に大きな権威を付与した。梅毒という近世に蔓延していった

新興感染症が、社会の様々な側面に及ぼした影響の大きさも指摘されねばならない。

(奈良女子大学)